

記念館の形は少し変わっていると思いませんか？

これは、今から1200年以上前に建てられた東大寺正倉院(奈良市)が床を高く、木を四角に組んだ「校倉造」で建てられていて、その昔、日本の大事な宝物がしまわれていた場所でした。世界的に有名な棟方志功さんの作品は「青森の大事な宝物」。だから、東大寺正倉院の「校倉造」をまねて(にならって)建てられたのです。



棟方志功記念館を見学しよう!

棟方志功さんの作品は4種類あります。



① 板画

はんが

もんせい さく 門世の欄 | 1968年

棟方志功さんは板画家です。自分の版画を「板画」といい、板の命を大切にするという思いから板という字を使いました。幅26mにも達する世界最大級の作品から縦横約6cmの小さな作品まで作りました。

② 倭画

やまとが



青森ねぶた図 | 1960年

板画のような彫刻刀ではなく、筆に日本画用の絵具をつけて、描いた作品です。板画でもそうですが、棟方志功さんが使う色は、どこかで見たことがありませんか？ そうです。志功さんが大好きだったネブタの色づかいに似ていますね。

③ 油絵

あぶらえ



バラ花弁図 | 1941年

棟方志功さんが画家を目指すべきかとなった油絵。板画家として成功してからも、自由に楽しみながら描き続けました。

④ 書

しょ



ゆう せいさくねんふみい 遊 | 制作年不明

小さい頃から字が上手だった棟方志功さんが書く文字は、白い紙に黒い墨が飛び散って、元気一杯です。芸術の書は「キレイな形にこだわるのではなく、心の中から飛び出すような気持ちを大切に書かなければいけない。」と棟方志功さんは言っています。

この「青森の大事な宝物」を観覧しようと、年間数万人のお客様が記念館を訪れます。これからみなさんにも他のお客様と一緒に棟方志功さんの作品を観覧してもらいますが、次のことを約束してください。

観るときの約束

- お話は小さな声で
静かに観たい人のじゃまをしない
- 走り回らない
他の人の迷惑になることはしない

みなさんも、離れて観たり、近づいて観たり、お気に入りの作品を見つけてみましょう。

学校名	年 組
氏名	

棟方志功さんは1903年(明治36年)9月5日に、9男6女15人兄弟の6番目、三男として青森市(善知鳥神社のすぐ近く)で生まれました。

生まれたときから声が大きく、その泣き声は隣近所に響き渡り、「棟方さんの家では鬼の子でも生まれたのか?」と評判になりました。



鬼の子誕生



家は鍛冶屋で父(幸吉)は腕のいい鍛冶職人でした。鍛冶屋とは鉄を焼いて、熱いうちに打ちつけ、刃物などを作るところです。父が刃物を作り、母(さだ)が売り歩く。

兄弟も多く、決して豊かな暮らしではありませんでしたが、厳しい父、優しい母のもとで、志功少年はすくすくと育ちました。



棟方志功さんは
どんな人でしたか?

性格は明るくて、誰にでも優しい人でした。好きな食べ物は焼き魚の「さけ」。A型のおとめ座でうさぎ年。小さい頃から視力が弱く、最後には左目がまったく見えなくなりました。お医者さんには細かい字を読むことを禁止されていましたが、それでも本を読み、勉強し続けた努力の人です。

小学生の棟方志功

生まれつき眼が悪かった志功少年ですが、小さい頃から絵を描くことが大好きでした。

友達からのリクエストにもどんどんこたえ、絵の腕前を上げていきましたが…意外にも学校での図工の成績は、「丙」今でいう「C」でした。



なぜかという…先生が「魚の絵を描きなさい。」という志功少年は魚の頭の部分だけを巨大に描いて、先生にしかられました。

そんな志功少年の口ぐせは「世界一になる!」でした。



小学6年生の授業中、突然外が騒がしくなりました。近くの田んぼに飛行機が墜落したのです。これは大変だと、みんなで墜落現場に走っていく途中、志功少年は、つまずいて転んでしまいました。



おもただかの花

ふと顔を上げると、目の前に小さくきれいな白い花が咲いていたのです。飛行機のことをすっかり忘れ、この「おもたか」という花の美しさに感動した志功少年は、このとき「この美しさはオレのものだ。この美しさを表現できる人になろう。」と思いました。

小学校を卒業した志功少年は、裁判所の給仕(書類を届けたり、掃除をしたり、色々な世話をする係)として働きました。しかし大好きな絵をやめたわけではなく、仕事の合間に、公園(合浦)へ出かけたりして描き続けていました。

そんな絵が大好きな志功青年に、ある人が一枚の絵を見せてくれたのです。きれいで鮮やかな油絵具で描かれた絵は、あの有名なゴッホの「ひまわり」だったのです。この絵を見た志功青年の心に衝撃がはりました。

「わだばゴッホになる。」
 どうしたらあのような絵が描けるのか。「東京に出て絵の勉強をしたい。」と心に決めた志功青年は、東京へ出発する時にみんなの前で誓いました。
 「帝展に入選するまでは、何があっても青森に帰ってきません。」

※帝展：当時、日本で一番有名な絵の展覧会

志功の決意



板画作品の題名に
 ついている「柵」とは
 どういう意味
 ですか？

ふつうは家と家の間や、場所を区切るために立てるものを柵と言いますが、棟方志功さんが使う「柵」は、そういう意味ではありません。たくさんのお寺を巡り、願いをかけて歩く「お遍路さん」が、一つひとつのお寺に願いを込めておさめていくお札があります。

そのお札のように、棟方志功さんも一つひとつの作品に願いを込めて「人生の道しるべとして、柵を打つように」という意味から、板画作品の題名の最後に「柵」という文字をつけたのです。

東京での苦勞時代



21歳で上京した棟方志功さん。東京での生活は決して楽ではありませんでした。納豆売りや靴修理の注文を受けるアルバイトなどをしながら、絵を描き続けました。

いろいろな芸術を見て歩き、誰かに絵を習うのではなく、ひとりで絵を勉強しましたが、帝展に落選すること4回。この4年の間に青森では、祖母、父が亡くなっていました。でも、みんなとの「帝展に入選するまでは青森に帰らない。」という誓いを守り、志功青年は一度も青森に帰りませんでした。

そして、ついに5回目の挑戦で青森市にある知り合いの果樹園を想像して描いた「雑園」という油絵が見事、帝展に入選しました。これで晴れて、画家「棟方志功」が誕生したのです。



雑園習作 | 1928年
 帝展に入選した「雑園」は残っていませんが、この作品は、帝展のために練習して描いた作品(習作)です。

普通の版画は
 白黒ですが、
 棟方志功さんは
 版画にどうやって色を
 つけていますか？

版画家は作品に色をつけるときは、その色の数だけ、版を彫ります。例えば3色だったら、3枚の版画を彫って、3回刷ります。でも、棟方志功さんの場合は、1回だけすっただくろ 黑板报の裏側から、直接筆で紙にしみこませるように色をつけました。棟方志功さんは、この技を「裏彩色」と呼んでいました。

あひらえがな めざ 油絵画家を目指した志功さんですが、あるところから心に疑問を持ち始めます。

あひらえがな かにく せいよう の 油絵は外国(西洋)のモノ。いくらがんばっても外国(西洋)人を超えられないのではないかな?

そんけい 尊敬するゴッホも 作品の背景に浮世絵版画をか描いている...

日本人として、日本の芸術「版画」を極めよう!



はんがが けっしん と、版画家になる決心をしたのです。

その後たくさんの人々から板画ばかりではなく、仏教の世界など色々なことを教わり、ひたすら努力を続けました。

その結果、1955年(志功さん52才)ブラジルサンパウロビエンナーレと、次の年のイタリアヴェニスビエンナーレという世界でもトップレベルの大きな展覧会で版画部門のグランプリを2年連続で獲得しました。

世界のムナカタに

これで、棟方志功の名前は世界中に知れ渡り「世界のムナカタ」と呼ばれるようになりました。現在、志功さんの作品は世界中の有名美術館に所蔵されています。

※所蔵：大事にしまっておくこと。



棟方志功さんはいくつくらい作品をつくりましたか?

せいかく 正確にはわかりませんが、1万点以上とされています。作品を制作中に気分が乗ってくると、青森の民謡やベートーベンの「第九」などを口ずさんでいました。

はんが きわ ちょうこくとう はんが 板画の道を極めた志功さんは、彫刻刀で作る「板画」だけではなく、筆に絵具をつけて描く「倭画」や若いころから描き続けた「油絵」、墨で迫力ある文字を書く独自の「書」など、あらゆるジャンルの芸術に一生懸命努力をしたことが認められ、1969年(志功さん66歳)青森市、名誉市民第1号に選ばれました。

さらに次の年の1970年(志功さん67歳)には天皇陛下より「文化勲章」を受章しました。文化勲章の長い歴史の中で、版画家での受章は、いまだに棟方志功さんただ一人です。



この文化勲章受章から5年後、世界的な板画家の作品をいつまでも大事に展示しようと、生まれ故郷の青森市に棟方志功記念館が開館しました。

記念館の完成を楽しみにしていた志功さんですが、1975年9月13日、開館の2ヶ月前に72歳でこの世を去りました。



棟方志功さんは現在、青森市三内霊園にある、尊敬するゴッホのお墓と同じ形をしたお墓で眠っています。

文化勲章受章

(財)棟方志功記念館

〒030-0813 青森市松原2丁目1番2号 Tel.017-777-4567 Fax.017-734-5611 <http://munakatashiko-museum.jp>